

40551

教科書文庫

4
110
41-1916
<del>20000</del> 65496

20003  
02798

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

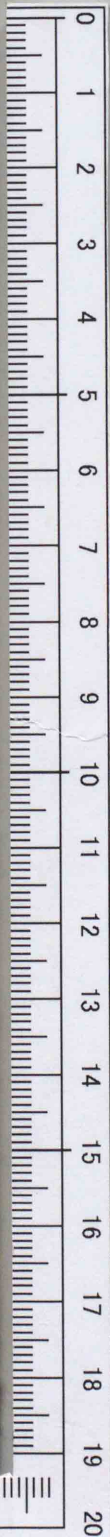
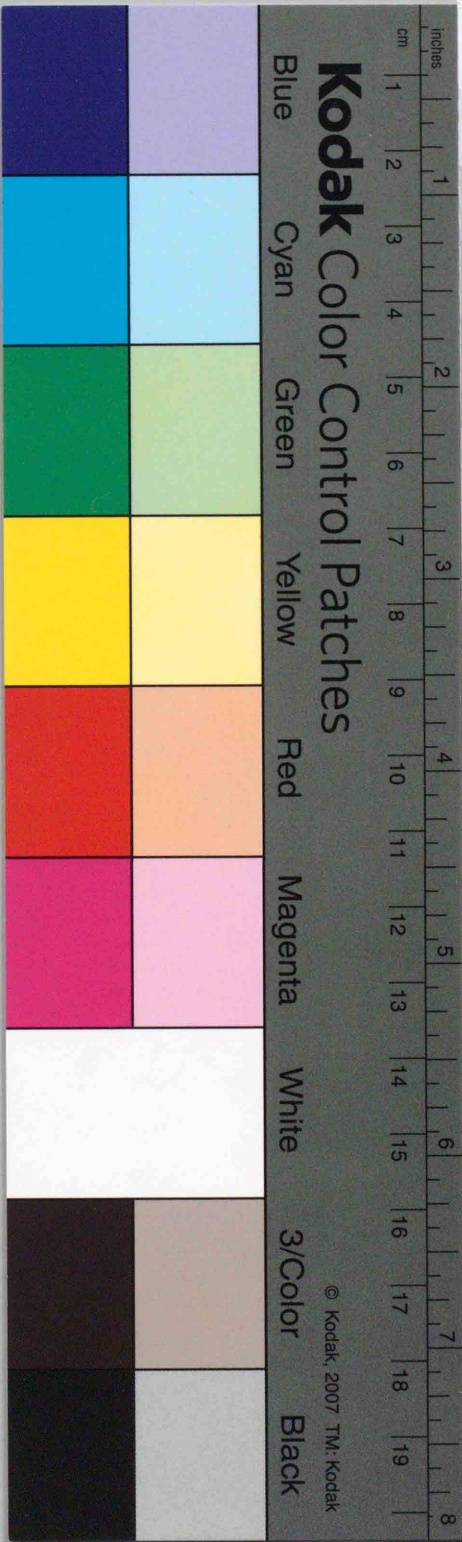


© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak



4a
110
大5

# 中學修身書

嘉納治五郎著  
修正改版  
卷三



42  
110  
大5

資料室

大正五年十二月二十五日

文部省檢定濟

嘉納治五郎著

修正改版

# 中學修身書

東京 元元堂書房



## 勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ  
樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億  
兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國  
體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民  
父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉  
己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ  
智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ  
開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義



勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ  
如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ  
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン  
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民  
ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ  
中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ  
咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

## 御名 御璽

### 詔 書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼  
此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ  
修メ友義ヲ悖シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコ  
トヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ  
共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日  
尙淺ク庶政益更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實  
業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ  
華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ



抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ  
成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪  
ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今  
ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ  
維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威徳ヲ對揚セムコトヲ  
庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

## 御名 御璽

明治四十一年十月十三日

## 中學修身書 三

### 目次

第一章	人生と修養	一
第二章	身體生命	五
第三章	身體の修養(上)	九
第四章	身體の修養(下)	三
第五章	智能	六
第六章	智能の修養(上)	二
第七章	智能の修養(下)	四



第八章	德性	.....	二六
第九章	道德の修養(上)	.....	三三
第十章	道德の修養(中)	.....	三五
第十一章	道德の修養(下)	.....	三九
第十二章	恭儉	.....	四三
第十三章	勇氣	.....	四七
第十四章	忍耐	.....	五〇
第十五章	克己	.....	五四
第十六章	誠實	.....	五七
第十七章	寛容	.....	六一

第十八章	博愛	.....	六一
第十九章	正義	.....	六六
第二十章	節操	.....	七三
第二十一章	敬愛	.....	七六
第二十二章	公共心	.....	八〇
第二十三章	目的	.....	八二
第二十四章	事物の判断	.....	八七
第二十五章	善美なる人生(上)	.....	九一
第二十六章	善美なる人生(下)	.....	九五



目次終

中學修身書 三

嘉納治五郎著

第一章 人生と修養

人<sup>〇</sup>は天地の間に生れて、萬物の靈長と稱す。如何  
 なれば人を斯くいふぞ。其の草木禽獸と異なる所  
 以は何處にかある。如何<sup>〇</sup>にせば、人<sup>〇</sup>と生れたる甲<sup>〇</sup>斐<sup>〇</sup>  
 あるべき。古歌に

人多き 人の中にも 人はなし



人になせ人 人になれ人

といへり。吾人にとりて人となることを務むるほど大切なるはなし。

凡そ人の萬物に優れたる所以は、己の本性を自覺して、之を修養し、社會の爲に、有益なる事をなすにあり。他の生物は、多くは其の本能によりて生活するのみ、自覺せる目的あるにあらず。櫻の美麗なる花を開くも、蜂の芳香を尋ねて蜜を吸ふも、猫の巧に鼠を捕ふるも、多くは本能の作用なり。然るに、人は靈妙なる心身を具有せるを悟り、本能のみに任せずし

て、之を修養。開發し、之を世の爲に活用す。人類の文明は、年を逐ひて進むも、草木禽獸は、千年萬年、殆ど同様の生活を反復するのみにして、更に進歩の状をなさざるは、其の原由此に存す。

されば、不學無術にして、社會國家の用を爲すこと能はざるものは、人と生れたる甲斐なきものといふべし。貝原益軒曰はく、人と生れて學ばざれば、生れざると同じ。學びても道を知らざれば、學ばざると同じ。道を知りても、行はざれば、知らざると同じと。學ぶも眞に知るものは少く、知るも之を應用する者



は少し、努めざるべけんや。

木は若きうちに矯めざるべからず、人は年少なる間に學ばざるべからず。春は萬物の發達するときなり。年少の時は人生の春にして、最も修養に適す。成長して精神も身體も固定して後は、修養も容易に意の如くなるものにあらず。されば、此の時を空しく過さざるやう力むべし。天地の春は歳々回り來れども、人生の春は再び至らず。歲月人を待たず、年少の時は夢の如くに過ぎんとす、昔、徳川頼宣嘆じて曰はく、吾に再び十四歳の時あらんや」と、省みざるべ

元和元年  
五月七日  
井山  
松平正綱  
紀伊候

けんや。

第二章 身體生命

事の卑近フシなるが如くにして、其の及す所の重大なるは、身體テイに關する道なり。身體強健テイケンなるときは、活力内に充滿して、心氣爽快シンキに、よく勤勞に堪へて、楽しんで業務に従ふを得べし。不健フケン康クワンなるときは、氣力は沈衰して、精神は陰鬱インウツとなり、心はあせれども事は成らず、終には煩悶ワンモンして此の世を悲觀するに至ることさへあるものなり。是れ此の世のはかなきにあ

身體強健ナルは



らず、我が身の弱きなり。身體強健ならば如何なる境遇にありても、世は望多く心は常に勇むことを得べし。

又、身體は己一人のみを本として、考ふべきものにあらず。身は父母より受け、其の無限の恩愛によりて養育せられたるものなり。之を強健にして己が務を勵み、以て父母の心を安んずるは、孝道の第一歩なり。孝經にも、身體髮膚、之を父母に受く、敢へて毀傷せざるは孝の始なり。といへり。且つ、他日身を立て家を齊ふるも、身體の健康によること甚だ多し。

實に我が身の健康は一家の幸福、子孫の繁榮に關するものといふべし。

國運の興隆するは一國の富強文明なるに因り、一國の富強文明なるは國民の強健なるによること多し。而して國民の強健なるは、其の身體の修養を勵むと否とによる。今日、我が國民の身體は、世界の各國民に比して、如何の程度にあるべきか。吾人は身體の修養に力を用ひざるべからず。

生命は唯一つありて二つなく、かけがへのなき貴きものなり。又、實に生命を愛するは、人間自然の本



性にして、心身の機能、多くは生命の保全を目的とす。然るに時としては、此の本性に反して自殺するものなきにあらず。是れ多くは、艱難憂苦に堪ふる勇氣なく、絶望のあまり自棄するものにして、決して健全なる人の爲すことにあらず。身は是れ父母の遺體なり、皇國の臣民なり、豈自重せずして可ならんや。一時の情に思ひつまり、己の苦痛を逃れんが爲に、我が身を殺して、君親に對する本務を顧みざるが如きは、道に反すること甚しきものなり。故に、我等は身體を強健にし、生命を全うし、以て己の本務を盡さん

ことを心がけざるべからず。若し、之を勉めずして天壽を縮むるが如きことあらば、或る程度の自殺なりといふべし。

第三章 身體の修養 (上)

身體の強健なると否とは、一は天賦によるものなれども、亦修養の如何によること少からず。天性強健なる者も、修養を怠れば薄弱となり、薄弱なるものも修養を勉むれば強健となるを得べし。貝原益軒は、幼時病弱なりしが、修養して次第に健康となり、齡

善を利  
人命を成すなり、  
天ニアラスト老チホ  
テリ。人命ハモトヨリ  
天ニ授ケテ生ツキシム  
モ善をモヨクスヘハ、  
善をモセカレハ短シ  
サシ。ニ長命ナラモ短  
命ナラシモ我ハ  
ミナリ。身強ク  
ニ長命ニモツキル  
人モ善をモ修メ  
ケレバ早シク老弱  
ニテ短命ナルベキト  
見ユル人モ保養  
ヲナスレバ長命ニ



八十を過ぐるも、氣力猶盛にして、著述に従事したり。松平定信は、少時多病にして、成長の望なく思はれしが、七十餘歳の天壽を保ち、幾多の功業を成せり。此の如き例、世に甚だ多し。之に反して、少時、身體の強健なるを誇りとせしものが、不養生にて若死を爲せる例も亦甚だ多し。されば、身體強健なりとも恃むに足らず、薄弱なりとも失望するに及ばず。吾人はたゞ修養の道を守るべきのみ。

年少の時期は、身體の發育甚だ盛にして、一生の健康の基を定むるものなれば、其の修養に最も力を用

ひざるべからず。殊に、少年の青年となり、大人となる頃は、身體に甚しき變化を生じ、新なる發達を爲すものなり。此の時期に際して、注意して修養するときは、終生の健康を固むることを得べく、然らざれば、屢疾に犯され、健全に成長することを得ざるべし。

又、吾人の身體は、單に強健なるのみならず、有用なるやうに修養せざるべからず。身體強健なりとも、人生社會の用を爲すに適せざれば、頑石の徒に存するが如きのみ。熊澤蕃山は、青年の頃、體軀肥滿に過ぎ、武士の職分に適せざることを悟りしかば、薄衣粗



食して、晝夜武術を勵み、嚴寒・炎暑にも山野を跋渉し、終に強健にして、且つ活動の自在なる身體となせり。蕃山の如きは、よく身體修養の目的を解せるものといふべし。

第四章 身體の修養 (下)

身體修養の要道は、攝生と鍛鍊との二つなり。攝生とは、身體を保護し、過度無法の事を爲して、健康を害することなきやうにするをいふ。鍛鍊とは、氣力を勵して、艱苦にもあたり、身體の活動と抵抗との力を強くすることなり。此の二つの道は相俟ちて身體を強健ならしむるものにして、其の鈞合をよくすること必要なり。

病は飲食の過度より起ること少からず。寒暑の酷烈なるも、睡眠の不足も、運動の過激も、皆身體に害あり。身體は微妙なる機關にして、やゝもすれば損傷を受け易きものなれば、保護を加へ節度を守り、常に攝生に注意せざるべからず。されど、保護も度に過ぐれば柔弱の本となり、活力これが爲に減退するに至らん。吾人の目的は、たゞ無病にして生存せん



とするにあらざ、人として有用なる務めを爲すにあり。されば、常に一室に逸居して、身體の無事なるを希ふべくもあらざ。時には雨雪寒暑を冒し、飢渴に堪へ、艱苦を凌ぎて、勇往邁進するを要す。是を以て、吾人は平素其の道によりて、力めて身體を鍛鍊すべし。

少壯の身體は、最も鍛鍊を加ふるに適す。幼稚なる時は、未だ強き鍛鍊を受くるに堪へず。老成の後には、鍛鍊意の如くならざることあり。されば、少壯の時期に十分に意を用ふべし。勝海舟は、百難を排し

馬田虎之助、  
勢手劔ノ基角ヲ、  
志子權現

て衰へず、老いて益壯なりし原因を、少時の武術鍛鍊に歸せり、理ありといふべし。志氣一たび振へば、艱苦も艱苦とするに足らず。鍛鍊は青年期の最も壯快なる事たらずんばあらず。

◎「善く身を養ふものは、常に病を病なきに治む。」注意すべきは、平素の攝生と鍛鍊とにあり。人、健康なるときは、さほど其の必要を感じざれど、一旦病床に就かば、俄に健康を恢復せんとするも、容易に意の如くなるべきにあらず。諺にも、「病は馬にて來り歩みて去る。」といへり。若し疾にかゝりたるときは、直に



治療を怠るべからず。病を輕んじ、又は之を告ぐることをためらひなどして、手後れとなりては治療の效を奏すること難きものなり。されど、病はたゞ醫藥のみにて治すべきものにあらず、諺に、病は氣で勝つ。「病は氣から。」などいへるは、皆道理あることなり。

第五章 智能

智能は、人の光なり、力なり。其の作用はよく宇宙の道理を探り、自然の寶藏を開き、以て人生社會の益

迷信  
科學の鬼相に  
反すこと。

を爲さしむ。幾千年の昔、文明の光、人類の間に輝き始めしより、世界の文運は次第に進歩して、今日に及べり。現今開明の社會を以て、往古草昧の世に比すれば、殆ど天地を別にするが如き思あらん。是れ人類智能の進歩せる結果なり。

智能の低き者は、闇愚にして、事物の道理を知らず、迷信に陥りて、自ら誤り又人を誤る、其の害實に測るべからず。此の如くにして、いかで文明の高等なる生活を營み、身を立て世に處して、向上の路を進むを得んや。人生は智能の優なるを以て無上の寶とす。



たとひ家富み財豊なりといへども、不學無術なるは、其の身の恥にして、禍又是によりて生ずべし。

國家の盛衰は、國民の智能如何に因る。國民の智能高ければ、中に國力を充實して、外に國光を發揚するを得べく、國民の智能低ければ、國際の競争にも堪ふること能はず、國運次第に衰へざるを得ざるべし。今や、我が國は東西の文明を容れ、國運の發展をはかりつゝありと雖も、世界の文明諸國に比すれば、未だ決して優なりといふを得ず。新發明新發見の世界を動すに足るもの、未だ生ぜざるのみならず、日常百

般の事物にも、教を外國に取らざるを得ざるもの多し。吾人國民たるもの努めざるべけんや。

且つ、今日文明の恩澤は、世界幾多の先人が智能を磨き、業務を勵みたる結果なり。今日、吾人の衣食以て生を養ひ、醫藥以て疾を治し、産を興し人に交り、有無相通じ、彼此相濟し、生々繁榮するを得る所以のもの、何物か世界文明の恩澤ならざる。されば、吾人も亦、智能を磨きて、宇内の文運を贊け、後世に益する所なかるべからず。是れ吾人の世界人類に對する本務なり。



吾人の智能を修養するは、實に此等の重大なる本務を盡さんが爲なり。年少の人、よく學問の目的を解して、奮發勉勵せざるべからず。一たび學問の目的を誤るときは、勞して効なきのみならず、却つて害を生ずることあるべし。許衡が、幼時「學問の目的は、科第を取るのみにあらず」といひしは、誠に貴き心がけなりといふべし。

第六章 智能の修養 (上)

教を受くるにも、自ら修むるにも、學問の本となる

ものは注意なり。注意の弱きもの、ましまらぬものは、長時の間、机に向ふとも、其の効少し。「心こゝに在らざるときは、視れども見えず、聽けども聞えず、食へども其の味を知らず。」書物を開きながら遊戯の事に思を馳せ、講義を聽きながら、他の事を考へなどしたらんには、始より學ばざると同じ。學問は主として、努力して注意を專にするより成る、興味のみ多からんことを欲するなかれ。又、身體の健康は、注意の力に關係あるものなれば、吾人は飲食の節制、睡眠の適度など、身體の攝養にも心を用ひざるべからず。



書を讀み講義を聽きなどする時は、先づ其の言語文字の意義を精確に解釋するやう心がくべし。解釋一たび誤らば、毫釐も千里の差を生ずるに至るところにあるべし。言語文字は、實際の事物を傳ふる具たるに過ぎず。學ぶ者は、單に之を記誦するに止めず、其の内面の意義を明にせんことを要す。解釋を精確にするには、一字一句も苟もせず、前後の關係全體の趣旨に注意し、綿密に思考すべし。粗雜にして、勞を厭ふ者は、決して何事をも成し得ざるなり。

事物の觀察と實驗とは、確實なる知識を得る要道

1749 — 1823

要領

浮んノをたむ

理由

通者生姓

なり。ジェンナーの種痘術に於ける、ダーキンの進  
 化説に於ける、孰れか觀察又は實驗の結果ならざる。  
 發明・發見等學界（アルモノヲ見出ス）の新發展は、多く此より生ず。され  
 ば、實驗を爲し得ることは、傳聞想像のまゝに止めず、  
 周密なる用意を以て之を實地に徴し、常に觀察の習  
 慣を養ひ、日常身邊の事物をも、漫然看過することな  
 く、之を明敏に精査せんことを期すべし。意を用ひ  
 なば、一木一石といへども、多大の意義を有せざるは  
 なからん。



第七章 智能の修養 (下)

記憶せざれば如何なることを學びても、底なき囊に物を入れる、が如し。記憶をよくする道は、よく其の事物に注意すること、其の事物を順序よく覺ゆること、及びよく之を復習すること必要なり。注意せざれば、心に入ること深からずして忘れ易く、順序よくするときは、覺え易く思ひ出し易し。復習は記憶の方法として、最も大切なるものにして、生れつき記憶の力弱きものといへども、幾度も復習せば、必ず堅く覺えて忘れざるに至るべし。雨森芳洲は、八十一

覺ゆる事  
保持長キ  
用ひ早キ

見  
ハ  
ハ  
ハ

Doubt is the key of knowledge.

歳にして、始めて和歌に志し、が、二年の間に、古今集を誦讀すること一千遍に及びきといふ。此の篤志と精勵とあらば、老ゆといへども何事をか記憶し得ざらん。況んや年少にして、記性に富める時に於いてをや。

學びても理解せざれば、物を食して消化せざるに同じ。理解してこそ、知識は眞に我がものとなるなれ。理解は思考を要し、思考は疑を以て始まる。疑問は知識の寶藏を開く鍵の如し。古人は、學は能く疑ふを以て明なり。といへり。パスカルが、幼時音響



爲以之在解題

以不能疑爲不明故  
大疑則可有進不疑則  
不可進不疑道  
皆疑有邪正  
精思不得已而  
疑者正者疑  
者疑者正也  
予予白止(大疑解)

の學理を考へ出せるは、皿の響に疑を發せしにより、  
其の數理に長じたるは、自ら問ひ自ら答へつゝ進修  
せしによる。されば、學問する者は、何故に然るか、と  
事物の理を推して、己の考を練るべし。初は容易に  
考のつかぬことも、種々の方面より、事物の前後の關  
係を、綿密に精確に考ふるときは、終に之を理解する  
ことを得べし。たゞ疑問にも道あり。適當の問題  
を適當に思考することは是なり。然らざれば、徒に苦  
むのみにて、却つて、害あることあり。

智能は精熟し、且つ應用せらるゝを以て貴しとす。

高橋東岡

熟せざれば用を爲さず、生學問は事を誤る基なり。  
熟するも用ひざれば、「寶の持腐」となるべし。僅に一  
部の書より得たる知識も、よく之に習熟し、よく之を  
活用せば、大なる效益を收むることを得べし。

學問の道は頗る多く、天賦の材能亦おのづから同  
じからざるものありと雖も、よく之を成就するは、一  
に勤勉の力による。伊能忠敬は、晩學なれども、よく  
其の師に事へ刻苦して大業を成せり。況んや少壯  
にして學に在る者、努力勉勵せば、何ぞ學の成らざる  
ことあらんや。



第八章 徳性

諸般の智能の中、道德に關するものを良智良能といひて、最も尊び重んずべきものとす。或る人、ソラテスに向ひて、「最良の學とは如何なるものぞ。」と問ひたるに、「それは善を爲すことを學ぶにあり。」と答へたりといふ。實に、善を爲すことを學ぶほど、重要なるはあらず。身體強健なりといへども、材智優秀なりといへども、之を善く用ふることを知らざれば、却つて我が身の害となることあるべし。苟も道德を本

良智良能  
本心  
人同く  
去りしや  
ニキヤ

とせざれば、功名も富貴も決して貴ぶに足らざるものなり。

人として、人の行ふべき道を知らず、知るも之を行ふこと能はざれば、何を以て人とすべけんや。目前の好惡に動され、利害の末を逐ひ、終生昏迷して朽つるが如きことあらば、人生も亦果敢なきものにあらずや。人の人たる所以を全うするは、道德あるによる。不徳なる者は、榮華の中にも、心に疚しき處あるべく、有徳なる者は、困苦不幸の中にも、自ら慰む處あるべし。人生、道德ほど切要なるはあらず。されば、

人々は



人は貧富の別なく職業の如何に拘らず、誰しも皆必ず道德なかるべからず。人々信義を重んぜずば、社會は一日も成立するを得ず。國民にして忠君愛國の心なくば、億兆の衆庶ありといへども、其の國は滅亡に傾くべし。道德ありてこそ、社會國家も榮ゆることを得るなれ。

古語に曰はく、揚子岐路分路を見て哭す。其の以て南すべく、北すべきが爲なり。墨子練絲を見て泣く。其の以て黄にすべく、黒くすべきが爲なり。と。年少の時、徳性の修養ほど重んずべきはなし。此の修養

子曰

十有五而志于學

三十而立

四十而不惑

五十而知天命

六十而耳順

七十而從心所欲

不踰矩

至徳の人

を諸般學問の主腦と心得て、力を用ふべし。

徳を修むるには志を立て、工夫を積むことを要す。孔子は、吾十有五にして學に志す。といへり。其の大聖として、範を萬世に垂るゝに至れるも亦立志に基づかずんばあらず。道德は、外より之を強ふるにあらず、人間固有の天性を本とするものなり。苟も志を立て、行を勵まば、誰か至徳の人となるを得ざらん。

第九章 道德の修養 (上)



道德を修養するには、先づ善惡の別を知らざるべからず。善惡の別、明なると然らざるとは、同じ場合に處しても、一善一惡全く反對の結果を生ずるに至ることあるべし。善惡の別は、人間多年の經驗によりて、次第に明確になりたるものなれば、己一人の智慧に任せては、淺果に思ひ誤ること少からず。殊に吾人は、廣く古今東西の徳教を考へ、實際の事例に鑑み、我が國の現代に適切なる道德を行ふべきものなれば、父母師長の訓戒、古人の嘉言善行を始とし、修身道德の書に依りて、其の知識を磨くべし。又諺に「人

は我が身の鑑」といふことあり。長者朋友など、日常接する人々の行動を観るときは、自ら反みて我が身の戒とすべきもの、取つて以て己の模範とすべきものなど、實際に適切なる知識を得ること多きものなり。

世に新説などいひて、さも道理あるが如くに、説き立て、人を煽動して、邪道に引入るゝことなきにあらず。而して、年少の人は、道德の知識猶未だ熟せず、世間の經驗未だ多からざるを以て、かゝる場合に、たゞ其の説の新奇なるに迷ひて、之に捉へらるゝことな



諸悪莫作  
衆諸善行  
自羊其意  
是諸佛也

しとせず。又、悪しき讀物の感化、悪友の誘惑などの爲に良智を昏まし、是非善悪の判断を顛倒するが如き例世に少からず。心の迷より、此の貴重なる身を、悪道に自棄することあらば、誠に嘆かほしきことなり、くれぐれも戒めざるべからず。

すべて、道德の教訓に接したるときは、是を世の實際に徴し、己の心に問ひ、是を會得すること眞實なるべし。眞實なる道德の知識は、是に感情の伴ふを常とし、善を好み悪を悪むこと、好色を好み、惡臭を悪むが如く切にして、必ず善に就き悪を避けんとする意

志に發するに至るものなり。たゞ道德の言語文字を記誦するのみにして、感情に動き、意志に發する所なきが如きものは、未だ眞の道德の知識を修め得たるものといふべからず。

### 第十章 道德の修養 (中)

我が良心に善なりと知りたることは、必ず之を行ふべし。惡と知りたることは、斷じて之を爲すべからず。私欲私情、心に起ることありとも、それに打克ちて、努力して良心に従ふべし。當初困難なること

習慣ノ利益

④精神經濟

一精神活動ヲ

簡便正健ニシテ

二精神活動ヲ

要スル注意ヲ

減カス

我々の善業を習慣に

するに、善業を

此の善業を、

善業に、

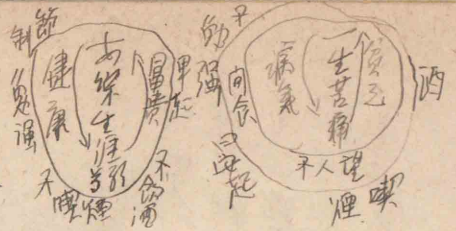
この善業、



も、反復之を行へば、終に固定したる習慣となるべし。之を徳性が我が身に備りたりといふ。習ひて性とならば、善行は至つて容易となり、復邪念の萌すことなきに至らん。

行は善惡共に反復すれば習慣となり、習慣となれば容易に動し得ざるに至る。中にも、惡習は知らず識らず、増長し易きものにして、之を改むること甚だ困難なるものなり。奢侈の習慣は次第に増長して、之を抑止すること難く、終には罪惡を犯してまでも、其の欲望を満足せんとするものあり。遊惰の習慣

行動の三戒  
行の三戒  
行の三戒  
行の三戒  
行の三戒  
行の三戒  
行の三戒  
行の三戒



生活之主要  
生活之主要  
生活之主要  
生活之主要  
生活之主要  
生活之主要  
生活之主要  
生活之主要

制言心教  
制言心教  
制言心教  
制言心教  
制言心教  
制言心教  
制言心教  
制言心教

王陽明  
自陰  
自陰  
自陰  
自陰  
自陰  
自陰  
自陰

を長ずるときは、困窮しても猶勤勉を厭ふに至る。されば吾人は力めて悪習慣に陥ることを避け、善良なる習慣を養成せざるべからず。フランクリンの修徳の工夫も、其の趣旨とする所は、悪習慣を打破して、代ふるに良習慣を以てせんとするにありき。

徳性は善行の習慣とされるものなれば、其の修養は常に實際の生活に於いてす。古人は之を「事上磨鍊」ともいへり。如何に多くの道德の書を読み、嘉言善行を知るとも、之のみにては、徳を修めたるものといふべからず。徳性は必ず道を實行することに依



飲食の時、徳  
節制禮義  
清静

遊戯の時、徳  
協同改  
君耐、勇気、正義  
禮儀

りて修養せらる。而して道の實行といふは、或る特別の場合に限るにあらず、如何なる時、如何なる處にも存す。日常の遊戯、飲食の際といへども、一切の視聽言動、凡そ徳性修養の地ならざるはなし。我等は、先づ日常の手近なる處より意を用ひて其の行を善くし、積んで徳性と爲さんことを力めざるべからず。「君子は食、飽くを求むることなく、居、安きを求むることなく、事に敏にして言を慎み、有道に就いて正す。學を好むといふべきのみ。」此くの如きをこそ眞の道德の修養とはいふなれ。

第十一章 道德の修養 (下)

徳を修むるには、善に遷ると過を改むると、二つの方面あり。 修徳に此の二つあることは、身體に關して、病を醫すること、健康の増進を計ること、の二つあるが如し。孔子は、「義を聞いて徙ること能はず、不善を改むること能はざる、是れ吾が憂なり」といへり。此の切なる志を以て、遷善改過に意を用ふるときは、誰か徳の成らざることあらん。

善に遷るには、先づ師長の指導を要すれども、少し



く長ずるに及びては、師長の指導に頼るを以て足れりとするべからず、常に己の良心に問ひて、其の示す所に従ふやう工夫を爲すべし。中江藤樹曰はく、「人の知らざるを以て、義を破ることなきは、學の始なり」と、善いかな言や。我等は人の在るとなきとを問はず、良心といふ貴き指導者を心の中に有す。人の指導、日常の習慣に従つて、事を爲す外にも、猶此の上に爲すべき善はなきかと、己の良心に問ひ、善より善へと進むやう意を用ふべし。

人誰か過なからん、よく改むるを貴しとす。然る

本意は  
吾日三省吾身  
為人謀而不忠  
與朋友交而不信  
乎  
徳を  
而  
不  
明  
也

に、己の過を知ること、甚だ難きものなれば、他の諫を受くるに、勇ならざるべからず。過を文り非を遂ぐるが如きものは、徳を成すこと能はず。又、吾人は自ら反省せざるべからず。我等の肉眼は顔の汚れを自ら視ることを得ざれども、良心は我が身の過を自ら知るの力を有す。曾子は、「日に吾が身を三省す」といへり。内に自ら省みるに至りて、修徳の功も亦大なり。

己に適切なる訓誡を選びて、座右の銘とすること、は、多くの前賢が實行せる所にして、遷善改過の機會



一筆

西内約

性急

重安

言下

言下

を作り、實際の工夫として頗る有益なることなり。  
此の他、韋弦を以て自ら戒めしものあり、絲の赤き白  
きを以て身を修めしものあり。 修徳の志だに誠な  
らば、工夫も亦多かるべし。

古人いふ、士別るゝこと三日、目を刮つて待つべし。  
と。夫れ、善の上にも善は限なし、吾人何ぞ低きに安  
んずべけんや。今日一悪を去り、明日一善を爲し、進  
修して倦まざれば、徳性次第に圓熟して、至善の域に  
入ること又決して難きにあらず。

第十二章 恭 儉

恭とは敬みの心深く、人に對して無禮ならざるを  
いふ。 儉とは己の心をひきしめて、放肆ならざるを  
いふ。 古人は恭儉の徳を解して、恭は莊敬なり、儉は  
節制なり。といへり。孰れも私欲私情を制して、放肆  
に陥らざる徳にして、恭は主として人に對していひ、  
儉はひろく人生萬般の事に渡りて行はる。 自負尊  
大以て人を凌ぐは、恭にあらざるなり、人を輕侮し  
愚弄するは、恭にあらざるなり。 恭は人を尊びて、己  
を慎む精神より出づ。 奢侈を戒め財用を節するも



儉なり。虚榮心を抑へ虚飾を去るも儉なり。怒を抑へ欲を塞ぐも儉なり。儉は己を重んじて、私欲を制し、之が爲に身を誤ることなからしめんとする精神に出づ。

恭儉は、自ら卑屈にして、己を束縛するが如くなれども、其の實は然らず。人を侮るものは人に辱められ、人に高ぶるものは人に賤めらる。盛徳の至は、自ら抑へて愈揚り、自ら謙して愈光りあるものなり。奢侈を戒めて節制を守るときは、財に餘あり。怒を抑へ欲を塞ぐときは、悔少し。すべて、情を縦にし欲

を制することなければ、一時の快を得ることありとも、後來必ず種々の不便障害を生ずべし。古來、身貴くして、賢を禮し徳を修めたるものあり。家富みて、節儉を守り、仁慈を行ひ、公益を廣めたるものあり。此等は皆世の美德とする所なり。富貴の人にして猶且つ然り、まして其の他の人に於いてをや。年少の人、やゝもすれば、意氣に任せて、父兄を蔑にし師長を凌ぎ、虚榮心に驅られて、物欲を縦にし金錢を濫費するが如きことなきにあらず。昔、一青年傲然として船中に經義を談じ、同乗者中に大儒貝原益軒ある



を知らず、上陸に際し其の名を聞き、慚愧に堪へずして、逃げ去りしことありといふ。世にはかゝる例少からず、戒めざるべけんや。

恭は必ず禮に依るべし。古人曰はく、「恭、禮に近ければ、恥辱に遠ざかる」と。恭にして禮に依らざるときは、言動其の宜しきを失ひ、諂諛に類することあるべし。儉は必ず道によるべし。財を節するにも、道なきときは、たゞ之を失はんことを恐れ、吝嗇に陥ることあるべし。諂諛となり、吝嗇となるは最も厭ふべきことなり。此等の別、明にせざるべからず。

第十三章 勇氣

勇氣とは、障害を排して、己が爲すべきことを遂行せんとする意志の力をいふ。されば、勇氣には必ず思慮分別の伴ふものにして、爲すべきことか爲すまじきことかを考へてするものなり。盲者の蛇におぢざるが如きは、盲勇ともいふべきものにして、眞勇にあらず。善惡正邪の分別もなく、一時の血氣に乗じて狂暴なるが如きは、狂勇ともいふべく、亦眞勇にあらず。



夫れ人生は、常住の活動、不斷の進歩ならざるべからず。而して、活動には艱苦伴ひ、進歩には障害あること免るべからず。艱苦に遭ひて氣益振ひ、百難を排して志益壯なるものにあらざれば、いかでか其の目的を達するを得ん。「斷じて行へば、鬼神も之を避く」とかや。古來の偉業は、皆勇者の手に成れり。

眞の大勇は、常に正道の上に存す。自己の本務を重んずる精神より、水火をも避けざる勇氣を生ずるなり。内に省みて疚しき處あらば、強ひて勇氣を勵すとも、其の甲斐なかるべし。曾子曰はく、「自ら反み

自ら反み

て縮からば、千萬人と雖も吾往かん」と。直ければこそ、此の大勇も生ずるなれ。されば、古人は又「義は勇によつて行はれ、勇は義によつて長ず」といへり。古來の志士・仁人・節婦・義僕といふは、皆道德上の勇者ならざるなし。和氣清磨・楠木正成の如き、其の好範例ならずや。

勇氣を養ふには、實地に就いて工夫を凝すこと必要なり。想像上の覺悟のみにては、葉公の龍の譬の如く、實際に臨んで狼狽することあるべし。水夫の怒濤に於ける如く、消防夫の烈火に於ける如く、實地



の鍛錬を経たる所には、大膽なるを得るものなり。されば、己の本務の存する所は、勉めて實地に就いて努力すべし。元來、人の本心は至大至剛なるものなれば、實地の修練を積むときは、大勇自ら生ずるに至らん。強ひて氣力を助長せんとせば、内心却つて沮喪することあるべし。

第十四章 忍耐

忍耐は、又意志の一種の徳なり。勇氣と忍耐と異なる處は、勇氣は我より進んで艱苦を排せんとし、忍

耐は艱苦の來り加るに、抵抗して屈せざるにあり。

諺に曰はく、「堪忍は萬寶に換へ難し」と、貴ぶべきは忍耐の徳なり。又曰はく、「一時の忍耐は、十年の慰なり」と、一時を忍ぶこと能はざるが爲に、終生の禍を來すことあり。吾人は如何なる辛苦も、堪ふべきことは、毅然として之を凌がざるべからず。且つ、吾人は一時を忍ぶのみならず、多年の間、之を永續せざるべからざることあり。「時間と忍耐とは、桑葉を變じて絹布となす。」凡て大事の成るは、長時の忍耐の結果にして、決して一朝一夕の激勵を以て、よく爲し得る



所にあらず。而して、長時の忍耐も、最終の一刻まで  
持續せざるべからず。古人に「短慮功を成さず」とい  
ふ題にて

急がずば ぬれざらましを 旅人の

あとよりはるゝ 野路の村雨

と詠みたるものあり。誠に「短氣は損氣」なり。

漢の高祖は、百敗屈せず、終に天下を統一したり。  
如何なる事業にても、多年辛苦經營の結果ならざる  
はなし。本居宣長が、古事記傳を脱稿し、古典の意義  
を世に明にするまでには、三十四年の歳月を閲した

り。上杉鷹山が米澤藩の財政を整理したるは、四十  
年間の勤儉力行の結果なりき。ワットは、蒸氣機關を  
改良して、實用に供するに三十餘年を費したり。ス  
チブソンは、機關車を完成するに、十五年を費した  
り。ジェンナーが種痘術に成功したるは、二十年の  
間、經驗と研究とを重ね、幾多の讒謗迫害を忍びたる  
後なりき。しかも、此等は皆稀有の例にあらず、終生  
努力して、成功を身後に見たるもの、亦少しとせず。  
少年にして、既に學に倦むが如きは、薄志弱行の事た  
り、猛省せざるべからず。



第十五章 克己

海波の起伏して止む時なきが如く、心の中には、感情・欲望、常に生滅して斷えざるものなり。情に喜怒・哀・樂等あり。欲に體欲・利欲・名譽の欲・權勢の欲等あり。人生何事に限らず、此等の感情・欲望が動機となりて、外にあらはるゝものにあらざるはなし。

さて、感情・欲望は、時に道に合ふことあり、合はざることあり。古語に、「樂んで淫せず。」といへる如く、樂も過ぐれば害となるなり。食欲も、道に合へば身を養

ひ、違へば健康を害す。一切の感情・欲望、皆然り。古人は、其の道に合ふを本心といひ、合はざるを私欲といへり。本心に從へば善となり、私欲を縦にすれば惡となる。善惡の機一に此に在り。

此の故に、吾人は、意志の力を以て、自己の感情・欲望を支配し、場合に應じて、或は之を制限し、或は全く之を抑止せざるべからず、之を克己といふ。克己の力、強きと弱きとは、善を爲すと惡に陥るとの岐るゝ所にして、全然道に依つて、己を支配し得るに至らば、一切の言行、皆善なるを得べし。



横木 隆恒

されども、内に氣質・習慣の偏するあり、外より誘惑の加るあり、時としては我知らず或は又知りつゝも、感情・欲望に驅られて、道に違ふに至ることあり。大勇あるにあらざれば、決して己に克つことを得ず。王陽明曰はく、「山中の賊を破ることは易く、心中の賊を破ることは難し」と。プラトーン曰はく、「己に克つは、勝利の最も大なるものなり」と。

人、少壯の頃は、感情・欲望の發動盛にして、誘惑に迷ひ過失に陥り易し。一たび之が爲に身を誤らば、終生悔ゆとも及ばざることあるべし、省察せざるべからず。

ら。塙保己一、年少の頃、怒り易き癖ありては、業を成すことを得ずと思ひ、心に誓つて怒を起さざることとを力め、終に其の志を遂げたりといふ。是の如きは眞の大丈夫なり。

第十六章 誠 實

誠實とは、自己の良心のまにまに善を行ふをいふ。他より強ひらるゝにあらざ、名の爲にするにあらず、利の爲にするにあらず、自ら求めて善を行ふこと、飢渴の飲食に於けるが如し。故に、誠實の徳は、善其の



者に無上の満足を感ず、他に求むる心なし。

◎誠實の行は自己の良心よりするものなれば、内外なく、表裡なく、終始一貫して渝<sup>カ</sup>ることなし。明暗によつて行を二つにし、前後節を變ずるが如きは、虚偽の事たり。誠實なる者の心は、唯本來の善のみにして、一點の邪念なければ、常に安らかにして、俯仰天地に愧づる所なし。之に反して、虚偽なるときは、人之之を知らんかと危まれ、内には良心の呵責ありて、自ら安んずること能はず。

吾人は萬事に誠實ならざるべからず。學業も誠

實ならざれば實効なし。禮儀も從順も、誠實ならざれば、虚禮偽善のみ。忠臣孝子の行、時に人をして感泣せしむるものあるは、一に至誠より發すればなり。菅原道眞の貶謫せられて君を慕ひ、中江藤樹の祿を棄て、歸養せるが如き、何れか至誠ならざらん。古語に曰はく、至誠は神の如しと。實に至誠の徳は、崇高の美を極め、其の力は、よく天地を感動するが如きものあるなり。

人は、本來良心を具有するものなれば、之を磨きて明にするときは、おのづから誠なるを得べし。私欲



に蔽はれて良心昏迷し、道は他より強ひらるゝもの  
 のやうに感ずるは、人の虚偽に陥る始なり。凶惡の  
 人といへども、なか善を好み不義を憎む心なから  
 ん。是れ良心の發露なり。此の心を擴充して、君に  
 事ふれば忠となり、親に事ふれば孝となり、兄弟には  
 友、朋友には信、公衆に及しては博愛となり、往くとし  
 て善ならざるはなし。己の良心に善と信ずる所を  
 守りて失はず、人の知ると知らざるとによりて、行を  
 二つにせざる、之を獨を慎むといふ。是れ誠實の工  
 夫の根本なり。

慎独

第十七章 寛容

寛容とは己の心をひろやかに持ちて、人の過失を  
 許し、嚴しく咎め立てせず、己と異なるものをも包容  
 する徳をいふ。人生れながらにして、徳性の圓滿な  
 るものは稀なり。個性によりて趣味氣質の異なる  
 あり。家族・社會等の境遇によりて風俗習慣の異な  
 るあり。若し多少の缺點過失を咎めて、許すことな  
 からんには、人も我も免れ得ること難かるべし。古  
 語に曰はく、「寛なれば衆を得」と。又曰はく、「泰山は土



壤を譲らず、故に能く其の大を成す。河海は細流を擇ばず、故に能く其の深きを就す」と。吾人は、宏量大度以て衆異を包容する大徳あるにあらざれば、決して多數の人と、事を共にするを得ざるべし。

高倉天皇は、「林間煖酒燒紅葉」といふ古句を誦して、宮丁が御愛の楓枝を折り焼きたるを、咎め給はざりき。毛利元就は幼時傳の躓きたる爲、水に溺れんとしたれども、道を行きて躓くは常の事なりとて、其の傳を咎めざりき。天皇の襟度、元就の雅量、欽すべきにあらずや。加藤嘉明の家臣、過ちて愛藏の什器を

壞りたるに、嘉明「我れ器を愛して、士を輕んずるが如き心あるべからず」とて、其の罪を問はざりき。名將の人を得るは、かゝる寛容の徳に因る。

嘉明の御愛の楓枝を折り焼きたるを、咎め給はざりき。

人を寛容すること能はざるは、一は度量の狭きによる。「浅き瀬にこそ、仇浪は立て、汪洋として萬頃（萬頃）の波の如くば、清濁併せ吞みて自若たるべし。世に自ら持すること清高なれども、人の小過をも恕すること能はざるものあり。此の如きは、人と大事を共にすべき器にあらず。古語に曰はく、「衣を千仞の岡に振ひ、足を萬里の流に濯ふ」と。吾人志を持すること



は、もとより、此の如く清高なるべし。されども、人に對しては、度量の寛大なるを旨とし、古語に、天空しうして鳥の飛ぶに任せ、海濶うして魚の躍るに委す。といへる如くならんことを、期せざるべからず。

采人 道徳家ナリ  
 范純仁曰はく、人、至愚なりと雖も、人を責むるには明なり。聰明なりと雖も、己を恕するには昏し。常に、人を責むる心を以て己を責め、己を恕する心を以て人を恕せば、聖賢の地位に到らざるを患へず。と。是れ寛容の工夫として最も適切なるものなり。

第十八章 博 愛

博く多數の人に同情を寄せて、其の益を計るを博愛といふ。 其中、鰥寡孤獨を始とし、白痴なる者、災禍に惱める者など、不幸なる人に恩恵を加ふることを、仁慈又は慈善といふ。 世には同じく人と生れながら、飢ゆれども食なく、寒けれども衣なく、疾にかゝりて醫藥なく、不具癱疾にして自ら生活すること能はざるものなど、其の數甚だ多し。仁慈博愛の徳は、此等の人々を救ひ慰め、其の及ぶ所は、獨り一地方一國內の人に止らず、廣く世界人類に達し、猶之をひろ



めては、憐を禽獸に加ふ、誠に貴き大徳なりといふべし。

不幸・幼弱なるものに對して、愛憐慈悲の情已むべからざるは、人の本性にして、人類の大徳を成す所以なり。世に、孤兒院・養育院・赤十字社等の存するは、人道の榮光を發揚せるものなりといふべし。然るに無情なること木石の如く、冷然として之を顧みず、時には其の力なきに乗じて、虐待壓制を加へて、自ら利せんとするが如きは、殘忍無道、罪も亦大なり。

仁慈は博く衆に及すを理想とす。されども其の

實行には、順序方法あるを要す。親族等の不幸に冷淡にして、世の博愛事業に盡すが如きは、事の本末を誤れるものなり。又、婢僕の如きも、一家に同住して、親密なる關係を有するものなれば、愛憐せざるべからず。其の制し易きに乗じて之を虐待し、却つて縁遠き他人の爲に奔走するが如きも、道に悖れるものといふべし。

仁慈の工夫は、其の人の境遇に、我が身を置き換へて考ふるにあり。斯くするとき、同情の心、自ら已むこと能はざるものあるべし。此の同情より人に



惠施するを、眞の仁慈といふ。すべて仁慈の美德たるは、其の誠實なる處に存す。少したりとも、名利の私欲を混ずるときは、美德と爲すに足らず。施して報を求めず、陰徳を行ひて無上の満足を感じる者にして、始めて誠實なる仁慈といふべし。かの恩を賣り名を釣りて、自ら利せんとするが如きは、偽善者の事なり。

第十九章 正義

正義とは、人に對して爲すべきを爲し、爲すべから

ざるを爲さざるをいふ。爲すべからざるを爲さずとは、人の生命を害せず、財産を奪はず、名譽を傷けず、社會國家の秩序を亂さざるが如きことをいふ。爲すべきを爲すとは、返すべきを返し、償ふべきを償ひ、契約を履行し、分配を公平にし、恩誼に報い、規則命令を遵守するなど、己が責任を盡すをいふなり。

爲すべきことを爲し、爲すべからざることを爲さざるは當然の事にして、誰しも之に違ふ者あるまじきことなれども、正義は容易に行はれ難きものなり。強者は弱者を凌ぎ、智者は愚者を欺き、相侵し相奪ひ



などして、世に紛争の絶ゆることなし。年々の裁判  
訴訟の數のみにても、正義を守らざる者の多きこと  
を知るべし。正義よく行はるときは、國家の秩序  
亂れず、社會の組織整ひ、人々其の分を全うすること  
を得べし。是れ此の徳が仁愛の徳と併せ尊んで、仁  
義と稱せらるゝ所以なり。正義を守り得ざるが如  
き者は、世の累ひ人の妨げとなるものにして、社會の  
健全なる一員たる資格なきものといふべし。

元來國憲國法は、國民の爲すべきことゝ爲すべか  
らざることゝを規定し、之に反くものに制裁を加へ

て、國家の綱紀を維持せんとするものなり。されど  
も、國民よりいへば、國家の制裁を恐れて、僅に法律に  
違はざらんとするが如きは、愧づべきことなり。常  
に正義に據りて其の身を持し、假令法律に規定なき  
ことにてても、苟も、國民の本分と認むべきことは、自ら  
進んで之を盡さざるべからず。

正義は小なりといへども、必ず之を守るべし。不  
義は小なりといへども、決して之を爲すべからず。  
古人曰はく、「惡小なるを以て爲すことなかれ。善小  
なるを以て爲さざることなかれ」と。吾人は窮して



も達しても、如何なる場合にも、必ず正義を守るべし。孔子曰はく、「不義にして富み且つ貴きは、我に於いて浮べる雲の如し」と。富貴も名譽も、正義に反しては取るに足らず。天野康景は無罪の一輕卒を殺すに忍びず、萬石の祿を辭して去れり。グラントが米國民の典型と稱せらるゝは、一は其の廉潔にして、正義を重んずる點にあり。敬すべきは正義の人なり。

第二十章 節操

節操とは、正義を守りて變ぜざるをいふ。人、や、

もすれば、正義と知りながら利欲に迷ひ、危難を恐れなどして、邪道に陥ることあるは、節操の徳なければなり。其の心、鐵石の如く、苟も不正不義の事を爲さず、古語に、「渴すれども盜泉の水を飲まず」といへる如くなるは、即ち是れ節操の人にして、眞に信賴すべく、敬慕すべき者なり。

曾子曰はく、「以て六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべし。大節に臨みて奪ふべからず。君子人か。君子人なり」と。豊臣秀吉歿して、國內全く徳川家康の威風に靡ける時、加藤清正は、秀吉の遺孤、秀



頼を擁護して、少しも其の操守を變ぜざりき。大節巍然たりといふべし。

池田市郎兵衛は、戰國の勇士なり。困窮の時、寺澤廣高に厚遇せられしかば、其の恩誼を重んじ、後年諸侯の重聘に應ぜず、又常に言行に表裏なきを期し、人の知ると知らざるとを以て、節を變じたることなかりきといふ。此の如きは、よく古武士の節操を發揮したるものといふべし。

すべて、人の節操を變ずるは、禍福生死の際に迷ふに因るものなれば、一に正義の存する所により、毅然

として節を守るべし。一時の利欲に迷ひ、不義の財を貪りて、終生罪餘の人となり、不正の迫害に抗する勇なきが爲に、節を屈して、身後に汚名を遺すもの少からず。夫れ、義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも輕し。正義の爲には、千辛萬苦、また何かあらん。節操一たび破れば、これより敗徳汚行、相次いで生じ、遂に爲さざる所なきに至らん。男子の生を捨て、義を取り、女子の死を以て貞操を守るは、之が爲なり。幾多の忠臣義士の事蹟を見るに、千載の下、凜として生氣あるは、皆生死禍福の際に迷はざるによる。



第二十一章 敬 愛

人皆自ら貴ぶ心あり、牛馬木石の如くに遇せらるるを好む者あることなし。此の心を推して人に及ばば、己より下なるものをも、輕侮するを得ざるべし、況んや長上をや、君父をや。すべて、人を牛馬視するは、人の己を牛馬視するを許すに同じ、決して人に對する道にあらず。正義の徳も、人を敬して、之に對する本務を重んずる心より出づ。吾人は如何なる人に對しても、誠實なる敬意なかるべからず。而して、

敬の行は必ず禮儀によるべし。禮儀は敬意を發表する一種の規則なり。禮儀を以てせざれば敬意ありとも、或は傲慢、或は卑屈など、誤解せらるゝことあるべし。

人皆自ら愛する心あり。此の心を推して人に及ぶときは、親切となり、寛恕となり、仁慈となる。己の幸福なるときに、人の我を嫉妬するを以て快しとするか。己の困窮せるときに、人の恩惠を受けて、感謝の念起ることなきか。己の欲する所を人に及し、己の欲せざる所を人に施さざる、之を同情とも恕とも



いひ、以て仁愛の徳を行ふ工夫とす。仁愛を以て、至高の徳とし、恕を以て、其の工夫とすることとは、世界に發達したる徳教の一致する所なり。中庸に曰はく、「君子の道四つ、丘（孔子）未だ一つだも能くせず。子に求むる所以て父に事へんとすれども、未だ能はざるなり。臣に求むる所以て君に事へんとすれども、未だ能はざるなり。弟に求むる所以て兄に事へんとすれども、未だ能はざるなり。朋友に求むる所、先づ之を施さんとすれども、未だ能はざるなり。」と。此の誠を以てすれば、愛のよく行はれざるを憂へず。

敬と愛とは、義と仁との本となり、相俟ちて、人に對する道を全うす。敬して愛せざるときは、疎隔に流れて、親和すること難からん。愛して敬せざるときは、親しきに狎れ、却つて紛争を生ずることあらん。愛して敬を失はず、敬して愛を忘れざるを以て、道の要義とす。貝原益軒曰はく、「善を行ふには、愛敬を本とすべし。愛とは人をあはれみて、おろそかにせざるなり。敬とは人をうやまひて、あなどらざるなり。此の二つは、すべて人倫に交りて、善を行ふ心法なり。善をするは、愛敬の外になし。」と。



第二十二章 公共心

人は公衆と共同の生活を爲し、大小公私種々の團體に加るものなり。その團體と己とを一體のものとし、團體の利害を以て直に己の利害とする心を公共心といふ。すべて公共の社會は、其の全體の爲に存し、己も其の一員として、利害休戚を共にするものなれば、よく其の理を辨へて、公共の爲に力を盡さざるべからず。

公共に對する道は、先づ其の秩序規則を守り、一人

一個の私の爲に公安を害せず、進んで公益を廣めんことを計るべし。公共の徳義を害するものは、私欲私情なり。此の私を抑へて、公の爲に計ること、己一身の爲にするが如く、よく其の誠を盡すべし。私欲を離れて、公益を圖るもの多きときは、其の團體は榮昌し、私利を營みて公義を思はざるもの多きときは、其の團體は衰亡す。國家の盛衰も亦、常に國民の公共心の消長に従ふ。一朝事あるに方り、忠勇義烈、身を以て公に奉ずるも、公共心の發現なり。平素國法を遵守し、國益を増進するも、公共心の發現なり。忠



君愛國、すべて公共の心よりせざるはなし。

徳川氏が戦國群雄の間に崛起し、三百年の覇業を開きしは、諸將士の公共心盛なりしによる。其等の中には、一身を顧みずして味方の士氣を勵せるものありき、少數の手兵を提げて、大敵に對抗せるものありき、孤城を死守して、一身萬軍に當れるものありき。此の如きは、皆義勇公に盡す精神の盛なるに因らざるはなし。徳川氏既に戦亂を定め、治平を圖るに至りても、幾多の名賢は一身を捧げて事に任じ、以て太平の基を成せり。其等の中には、一國の大事を斷じ、

又君を諫むるに、毎に死を決して之に當りたるものありき、居常政務に盡瘁し、死に至るまで、奉公の精神を忘れざるものありき、己を非議せるものを怨まずして之と共に國に盡さんとしたるものありき。此の如きは、皆平時に於いて、公共心を發揮せるものならざるはなし。

斯く公共心は、平時にも變時にも、必要なるものにして、大小如何なる團體に於いても、常に實行の機會あるものなり。生徒間の會合に於いても、一級一校に對しても、和衷協同を旨とし、全體の利益を増進す



ることを計り、進んで國家公共の爲に、力を盡さざるべからず。

### 第二十三章 目的

目的なき人生は、目指す港もなく、闇夜大海に漂ふが如し。たゞ闇黒より闇黒に迷ひ行く外あるべからず。目的ありてこそ、人生の事、皆頼みあり、力あるなれ。されば、よく目的を定むるは、善美なる人生を作ることの始めなりといふべし。

然らば、吾人の目的は如何に定むべきか。毛利元

就は、幼少なりし時、天下に志すものにして、始めて中國に志を得べく、中國に志すものにして、始めて一國に志を得べし。故に志は須らく遠大なるべし。といひ、豊臣秀吉は、未だ榮達せざりし頃、此の上に三百石の加増を得んこと吾が願なり。徒に大望を抱くも何の益あらん。といへりといふ。目的は、元就の如く、先づ遠き處に定むべきか、秀吉の如く、近き處に定むべきか。是れ青年に取りて重大なる問題なり。目的を立つること遠大なるは、壯快なりといへども、實現せられずば、一場の空想に過ぎざらん。世の



大志を懐くといふもの、此の弊なきにあらず。目的を近き處に定むるは、著實なりといへども、其の弊や小成に安んずるに在り。是を以て、吾人の目的は、遠大にして、且つ同時に著實ならんことを要す。目的小なれば志氣振はず。志氣振はざれば、努力起らず、努力起らざれば、功を成すこと多からず。吾人天賦の性能は、之を修めて十分なる發展を爲さしめ、之を用ひて成るべく大なる業務を成就せざるべからず。決して低劣に安んじて、自暴自棄すべきにあらず。されど、成算なき目的は、遠大なりとも空中に樓閣を

築かんとするに異ならず。故に、吾人の目的は、實力と境遇とを顧み、手段方法を講じ、成功の見込確なるものにして、且つ成る可く遠大なるものを取るべし。是を遠大にして著實なる目的といふ。

### 第二十四章 事物の判断

事物に善惡の別あり、大小の差あり。之を判断して、其の取捨を誤らざるやうにすべし。善惡の標準となるものは道なり。君國父母に對することより、衣服・飲食に至るまで、皆其の道あらざるはなし。其



の道に合するものを善とし、反するものを悪とす。道は學びて人の知る所なれども、之を實地の判斷に應用することは容易ならず。萬事皆適度あり。然れども、何を以て實際の適度とすべきか、是れ輕々しく決し得ることにあらず。其の判斷に妥當を得るは、おもに常識の力による。常識は、經驗と思慮との結果として生ずるものなれば、吾人は事に應じ物に接する間に、漫然として過ぐるなく、省察思慮を加へ、以て之を養成せんことを勉めざるべからず。一場の空論を以て、率爾に事物の適否を判斷せんとする

が如きは、多くは事を誤る基なり。

事物の大小を判斷するも、亦常識による。遊戯に熱中して、學問を廢し、朋友との散歩の約を果さんとして、父母の用務の生じたるを顧みざるが如きは、容易に其の大小の誤れるを知るべし。されども、事の少しく複雑なるものに至りては、理非得失、相混じて、取捨の判斷容易ならず。此等は、常識の圓滿なるを俟つて、始めて能くするを得べし。

且つ、世には似て非なるものあり。善なるが如くにして、善ならざるものあり。惡なるが如くにして、



悪ならざるものあり。大必しも大とするに足らず、小必しも小とするに足らざることあり。仁慈の如き美德にても、其の道を誤れば、反つて他の依頼懶惰の悪風を助長するが如きことなきにあらず。正義の徳などに於いても、孟子は、「非禮の禮、非義の義は、大人は爲さず」といへり。又書經に、「細行を矜つとまざれば、終に大徳を累はす」とあり。大徳を累はすものは、小なるが如きも、其の實小として輕んずるを得ず。小を積まざれば、大を成し得ざることあるを思はざるべからず。されば、少壯の人は、勉めて老成の言に聞

き、又自己の經驗を重んじ、思慮を積み、以て精明にして且つ圓熟せる判斷力を養はざるべからず。

第二十五章 善美なる人生 (上)

人の一生ほど、心の持ち方によりて、善惡の大差を生ずるものはなからん。其の道に違ふときは、假令富み榮えて千年萬年生きたりとも、來し方はたゞ一夜の夢の如く、残るは悔と慚とのみなるべし。よく其の道を盡さば、如何なる境遇にありとも、此の一生は誠に善美なるものにして、人と生れたる貴さを此



の上もなく有りがたく感ずるならん。

人生の一面は運命に支配せらるゝものにして、禍福吉凶意外の事生じて、我が力の及ばぬことも少からず。是に於いて人は往々我が力の頼みがひなきを歎じ、ひたすら他の力によりて禍害を避け幸福を得んことを祈りて、種々の迷に陥ることあり。運命は外より至るものにして、我が身に苦樂の及ぶことありとも、吾人は之が爲に道を守り、善を行ふ力を妨げらるゝことなし。善悪は己の心の持ち方如何にあればなり。努力して善を行はゞ、外より來る災厄

も、我が心の禍を爲すに足らず、若し不善を行はば、外より至る幸福も却つて我が心の禍となるべし、何の悦ぶべきことあらん。且つ、世間の運命といふものには、其の實運命にあらず、我が身の行が之を招きたるもの少からず。我等は己の心の持ち方、行ひ方によりて、其の運不運如何に拘らず、善美なる一生を送るを得べし。

兎角人は順境には満心して、道を失ふに至り易く、逆境には悲觀して、自棄するに至り易し。順境にありては、益之を善用して向上發展の道に力を盡すべ



き責任あり。逆境にありては、萬難を排して己の目的を貫徹せんことを力めざるべからず。逆境に悲觀するが如きは、熱誠なる目的と、百折不撓の氣力なきとによる。貴き人と生れて、艱難に意氣を沮喪せしむるが如き、腑甲斐なきことやはあるべき。

徳川家康の遺訓と稱するものに曰はく、「人の一生は、重き荷を負ひて遠き道を行くが如し、急ぐべからず。不自由を常と思へば不足なし。心に望おこらば、困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基。怒は敵と思へ。勝つ事ばかり知つて、負くる

ことを知らざれば、害其の身に至る。己を責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるより勝れり。」と。此の心得だにあらば、人は艱難不幸の中にも、必ず善美なる人生の道を開くことを得べし。

第二十六章 善美なる人生 (下)

一日は小生涯なり。人生百年なるも、起臥動靜、日の生活を反復するに過ぎず。されば、全生涯を善くせんとせば、先づ一日を善くすべし。誤りて今日を過し、空しく明日を過し、日々誤り、日々空しからん



には、假令生くること千年なりとも、亦何の爲す所あらんや。

平常の一日を全うせんとせば、日課を定め規律を立て、之を厲行すべし。日課規律は、事の偏廢と混亂とを避け、力と時とを利用する所以なり。吾人の時と力とには限りあり。よく之を用ひざれば、空しく費して、何事も爲し得ざるべし。よく之を用ふるときは、多大の効果を收むることを得べし。よく過すも一日なり。無益に暮すも一日なり。其の用方如何によりて、其の結果に大差あり。何事を爲すと

もなく、爲さずともなく、漫然として日々夢の如くならんことは、誠に口惜しき限りならずや。

平素身體の攝生と鍛鍊とを心がくるものは、病にかゝることなく、勤儉貯蓄を勉むるものは、貧窮に陥ることなく、人に接してよく義務を盡し、仁恕を旨とするものは、怒り怨みを受けて、紛争を生ずることもなかるべし。平日の道をよくするとき、災厄異變を未發に防ぐことを得べく、假令發生したりとも、よく之に應じて其の禍を少くすることを得べし。されば、吾人は平時に、其の道を盡すことを怠るべから



ず。西郷南洲曰はく、「平日道を踏まざる人は、事に臨んで狼狽し、處分の出來ぬものなり。譬へば、近隣に出火あらんに、平生處分あるものは動搖せずして、取始末もよく出來るなり。平日處分なきものは唯狼狽して、中々取始末どころにはなきぞ。夫れも同じにて、平生道を踏み居る者にあらざれば、事に臨んで策は出來ぬものなり。」と。

而して、一旦異變に遭遇したるときは、「急がば廻れ」といふやうに、沈着に身を持し、機に臨み變に應じ、己の全力を盡して、其の上は事の成るを自然にまかす

べし。徒に、狼狽し憂苦し、疑惧するときは、成るべきことも成らず、小なる災をも却つて自ら大にするこ  
とあるべし。

此の如くにして、平時にも變時にも、各、其の道を盡して宜しきを得るときは、人生の事又遺憾なきに庶幾からん。



中學修身書 三終



明治四十四年十月廿六日發行  
 明治四十四年十一月四日再訂版  
 明治四十四年十二月七日再訂版  
 明治四十四年十二月三十日再訂版  
 大正五年十月廿二日再訂版  
 大正五年十一月五日再訂版

弊書房出品切實圖畫  
 授以御方相成御居  
 合御上之候は度直  
 接御註文被下置候  
 本館に於て之を準備仕候  
 間直に發行可仕候



著者 嘉納治五郎

發行者 瀨川光行

印刷者 渡邊八太郎

中學修身書(修正)卷三

舊定價金貳拾五錢

大正八年  
臨時定價金參拾五錢

發行所

大關大賣捌所  
大賣捌所

東京市外内藤新宿北裏町五十三番地  
元元堂書房

東京市京橋區元數寄屋町三丁目七番地  
北陸館書店  
大阪市南區心齋橋筋一丁目六十七番地  
松村文海堂

日清印刷株式會社印刷



